文化財ノート No.35

稲城の梨づくり（一）

—江戸・明治期の梨づくり—

稲城市教育委員会
社会教育課
稲城市東長沼2111
☎042－378－2111
発行　2001. 3. 5

川島家の「多摩川梨発祥之地」の碑

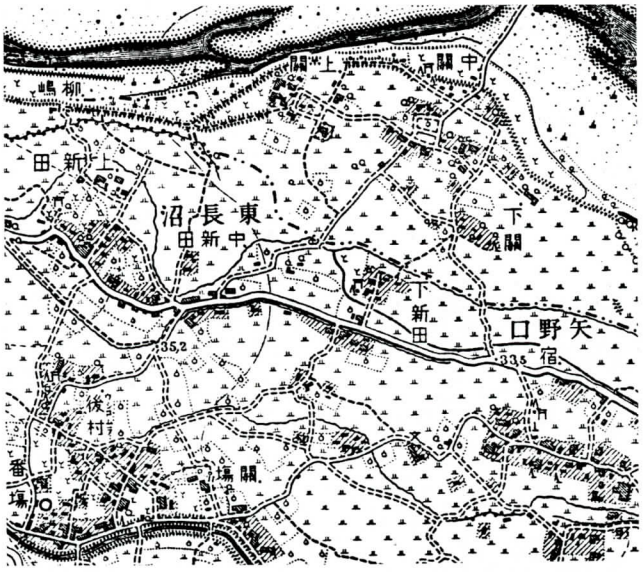
稲城でいつ頃から梨栽培が始まったかを伝える古い記録はありません。しかし、その歴史が江戸時代までさかのぼることは確かなようです。言い伝えによると、元禄年間（1688～1704年）に、長沼村の代官増岡平右衛門と川島佐治右衛門の二人が、公用で山城国（京都府東南部）に出かけ、その帰りに「淡雪」という品種の梨の苗を持ち帰り、村内に植えたのが始まりと言われます。その原木は、明治22年（1889年）まで東長沼の川島琢而氏宅（清玉園）の前庭にありました。幹回りが６尺（約180㎝）、枝張30坪（約100㎡）の巨木であったといわれます。清玉園には、稲城の梨づくりの始まりを伝える「多摩川梨発祥之地」の碑が、庭の片隅に建っており、江戸時代からの稲城の梨づくりの歴史を今に伝えています。

江戸時代に長沼村から始まった稲城の梨づくりは、川崎方面の村々からの梨づくりの影響も受けて、徐々に栽培面積を広げました。江戸時代の末には、長沼村、矢野口村、菅村（川崎市）にかけて広がり、その中心であった長沼村には十数戸の栽培農家があったと言われます。栽培農家を広げていった背景には、多摩川の氾濫原である肥沃な耕作地は水はけが良く、梨づくりに適していたことがあげられます。狂歌師として知られた太田蜀山人は『調布日記』（文化５年・1808年刊）の中で、稲城周辺の多摩川流域で栽培されている12種類の梨の名称を列挙し、また棚づくりによる梨栽培の様子も紹介しています。

明治時代に入ると、梨栽培は本格化し、各地に梨づくりの組合が誕生します。東長沼村では、

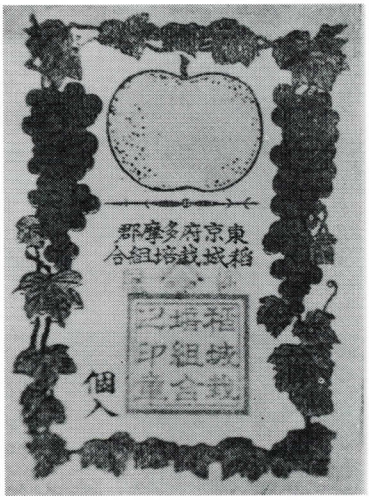
明治17年（1884年）に13名の栽培農家により共盟社が設立され、梨の苗木や肥料、かごなどの共同購入、共同出荷が行われるようになります。

明治33年（1900年）、稲城に梨の新品種「長十郎」が導入されました。甘味の強い赤さび色の長十郎は、またたくまに広まり、稲城の梨づくりの主流として広く栽培されるようになりました。この長十郎種は、大師河原村出来野（川崎市川崎区日の出町）の当麻辰次郎が、明治30年頃に発見した新品種です。広大な梨園を経営する当麻辰次郎は、ある年、黒星病で梨園が全滅しかけたとき、その中の１本だけに大粒の実がなっていることに気ずきました。その木は野生の梨を接ぎ木したものでした。大粒の赤梨で、大変甘味が強く、病気にも強いことから、彼はこの新品種の栽培に力を入れ、自分の家の屋号をとって「長十郎」と名付けました。



明治末の東長沼北部地域（明治 39 年測図）
（梨畑（♁）が水田（ㅛ）のなかに点在している.）

長十郎は、川崎市方面の村々から徐々に多摩川中流域の村々に伝わり、稲城村でもいち早くこの新品種を取り入れました。また長十郎の導入から５年後の明治38年頃には、甘味が薄くてやや酸味のある「二十世紀」の苗が、千葉県から導入されました。相次ぐ新品種の導入により、栽培面積も大幅に伸び、稲城の梨栽培は活気づきました。栽培面積の増大とともに、梨の販路も拡大していきました。明治10年代は、府中宿、五宿（調布市）ぐらいであったものが、明治時代後半には、東は東京市内、西は八王子、青梅、北は所沢、南は横浜までと著しく拡大していきました。



明治末の梨出荷用ペーパー
『多摩川梨変遷史』多摩川果物協同組合連合会編.

明治17年に東長沼村で設立された共盟社は、その後加入者が増えたために一旦解散して大字ごとに再編成されることになります。明治35年に「矢野口梨山懇親会」、明治37年に「東長沼梨山組合」の設立へと発展します。またこの頃に共同歩調により梨の名称を「稲城梨」と決め、共同出荷が行われるようになります。明治時代の中頃からは、水田を梨畑にする動きが加速し、徐々に梨の栽培面積は増えていきます。水田から梨畑に変えていった背景には、水田が水の補給が容易な場所であったことと、梨の販売による現金収入源としての魅力が大きかったためと考えられます。上図は、明治39年測図の東長沼地域北部の地図です。水田（ㅛ）のなかに果樹園・梨畑（♁）のマークが見られ、特に東長沼地域から押立地域にかけて散在している様子がわかります。水田の梨園化は、その後大正から昭和初期にかけて急激に拡大されることとなります。

参考文献.『稲城市史』『多摩川梨変遷史』